

ワークショップ

日本における臨床心理学の導入と受容過程

この原稿は、日本心理学会第 68 回大会ワークショップを元に、参加者の皆さんに加筆修正いただいたものである。

日時：2004 年 9 月 13 日 16：00～18：00

場所：関西大学 第3学舎 3C 教室

話題提供者 小泉晋一 (岐阜聖徳学園大学)
泉野淳子 (品川区教育相談センター)
高柳信子 (文教大学)

指定討論者 西川泰夫 (放送大学)
高砂美樹 (東京国際大学)

企画司会者 荒川歩 (立命館大学)

企画者 小泉晋一 (岐阜聖徳学園大学)

企画 日本心理学会 心理学史研究会

司会(荒川) ただいまから、ワークショップ「日本における臨床心理学の導入と受容過程」を始めさせていただきます。私は司会を担当させていただきます、立命館大学人間科学研究所の荒川歩と申します。よろしくお願いたします。

最初に今回のワークショップの流れについて簡単にご説明させていただきます。ワークショップのタイトルは「日本における臨床心理学の導入と受容過程」と大きなタイトルがつけられておりますが、もちろん2時間でこの大きなテーマを網羅的に検討するのは無理ですので、まず企画者として荒川のほうから簡単に、本ワークショップでの「臨床心理学の導入」について定義を行い、それ以前の状況、つまり

前史についてご紹介します。そこで、今回の話題提供の位置づけを確認したいと思っております。その後、小泉晋一先生・泉野淳子先生・高柳信子先生の順で話題提供いただきます。話題提供の先生は、それぞれ臨床の現場で活躍しておられる先生方です。最後に、西川泰夫先生と高砂美樹先生から心理学史とその方法論について研究されてこられた視点から指定討論をしていただこうと思っております。

さて、日本の心理学史については、これまで、西川(1995)、佐藤・溝口(1997)、心理科学研究会歴史研究部会(1997)、苧阪(2000)、佐藤(2002)や Oyama, Sato, Suzuki(2002)などによって論じられてきました。また、大泉(2003)も、『日本心理学者事典』として、歴史を論じているといえるでしょう。しかし、臨床心理学の歴史については、少し前まであまり研究がなされていませんでした。それに対して、実験心理学史を中心に蓄積されてきた技法を臨床心理学史にも応用して研究しているという流れが近年起こっているように思います。その一部を紹介する、というのが今回の1つの目標です。

臨床心理学の導入を議論する場合に、なにを「臨床心理学の導入」とするかという問題を整理する必要があると思います。この問題について、本ワークショップでは西洋的な心理学の教育を受けた専門家による「心理療法」、「精神療法」(このあたりの用語については泉野(2000)に詳しい)の開始を臨床心理学の広義の始まりとして捉え、それとは別に、ディシプリンとして教育制度が整備されていくのは臨床心理学の狭義の始まりとして捉えたいと思います。

日本の臨床心理学の導入の状況をご紹介する前に、まず、世界について簡単に触れたいと思います。世界の臨床心理学については、Walter(1957)やライスマン(1982)が紹介していますが、両者ともいつを臨床心理学の開始とするかについて明言は避けているように思います。他方で、下山(2001)は、McReynolds(1997)を引用し、世界的に見ると、1896年にWitmerが「心理クリニック」を開設し、同年のAPAの大会で、clinical psychologyという言葉を使ったのが臨床心理学の1つの最初であるとしています。

日本における最初の心理学者であります元良勇次郎が帝国大学教授になったのが1890年ですから、日本で「心理学」が導入された時期とほぼ同じくして、世界的に見れば臨床心理学は存在していたこととなります。

にもかかわらず、日本への臨床心理学の狭義の導入は戦後であると考えられています。たとえば、下山(2001)は、明治時代以前を「臨床心理学前史」、明治から第2次世界大戦を「臨床心理学の萌芽」期、戦後を「米国からの移入に基づく学問の組織化」の時期であるとしています。つまり、心理学が入ってきた明治から、本格的に臨床心理学が導入される戦後までに、ズレがあるわけです。そのあたりのことについては後ほど小泉晋一先生からお話いただけたと思います。

受容を考える上で、それ以前がどういう状況であったかを理解しておくことは必要だと思いますので、私からは、心理学が入ってくる前に、現在では臨床心理学の対象になりうる状況の人に対する対応はどのように扱われてきたを簡単に説明させていただきます。この明治時代以前の状況については、小田(1980)、小俣(1998, 2000)、岡田(2002)や八木・田辺(2002)など精神医学に近い立場から論考がなされています。私の方からは、これらの研究の紹介という形で当時の状況を簡単に紹介したいと思います。

日本で広義の精神疾患は古くから「癪狂」として扱われてきました。多くの場合は各自の家で看護がなされ、一部では、京都の岩倉が有名であります。が集団生活が営まれました。当時は、このような精神疾患の原因をどう考えるかによって治療法が異なっていたようです。病いの原因が憑き物、狐憑きなどとして考えられた時には、水治療法、たとえば、滝にあたりとか、温泉に入ることによって身体、心をきよめることによって病いから逃れるという治療法が行われていました。他方で病の原因が心のバランスの崩壊であると考えられた時には、日蓮宗の寺院における「読経療法」など、ある種の信仰によって治療が行われました。このような2種類の療法は日本に限ったものではありませんで、西洋においても看護の治療が教会にあったことや、水が治療法として用いられることがあったことが指摘されています。その他にも漢方や食事・お灸などが行なわれていました。基本的に心理療法に近いのは2番目の「読経療法」くらいのものではないかと思います。他方で、西欧諸国においては、監獄などで精神病患者が収容されるということがあったのですが、江戸以前の日本においてはそのような傾向はあまり認められなかったことが小俣(2000, pp13)によって指摘されています。

ところで、臨床心理学が入ってくる前にすでに精神医学の方が導入されていまし

て精神病院のもとになるものが明治初期の頃からつくられています。その一つが南禅寺の境内に 1875 年に設立された京都癲狂院です。ほぼ時を同じく 1876 年には Maudsley(1872)を訳した『精神病約説』が翻訳されています。他方で、東京の方でも、1879 年に東京府癲狂院が設立されました。

このころ、日本における精神疾患の治療において重要な役割を果たしたのが呉秀三であると言われていています(岡田, 1998)。呉秀三は東京帝国大学精神病学講座の教授で、府立巢鴨病院(後の松沢病院)院長として活躍しました。無拘束性を推進し、当時拘束されていた「精神病者」をできるだけ開放するという運動をしまして、また日本神経学会の設立にかかわりました。大学においては随意科として毎年 6 月末に 20 時間程度の「心理学講義」を行っていました。このような状況下で、広義の「臨床心理学」が導入されてきたのだと考えられます。

さて、臨床心理学の各流派の導入について、精神分析学の受容については安齋(2000a, 2000b)および鈴木・井上(2001, 2002)で論じられております。またユング派の受容については安齋(2001)によって論じられております。しかし、ロジャース派、いわゆる来談者中心療法についてはあまり論じられていないように思います。そこで、後ほどこのロジャース派に焦点の一つを当てて、ロジャース派の導入期についてお二人の先生からご報告いただこうと思います。まずは、実践家でもあり心理学史の研究者でもあります泉野淳子先生にお話しいただき、その後、高柳信子先生に、お話をいただきます。

皆様ご存知かもしれませんが、簡単に高柳先生についてご紹介させていただきます¹。高柳先生は、東京女子大学哲学科を卒業されたのち、東京教育大学厚生課医局、白金幼稚園を経て、昭和 31 年から 37 年まで国立精神衛生研究所の研究生をされました。それと平行して、昭和 34 年に設立されたばかりの日本カウンセリングセンターで講師を、昭和 35 年には神奈川県立中央精神衛生相談所の設立と同時に「臨床心理技師」という名前で勤務をされました。当時、臨床心理技師は日本で二番目であったそうです。また、ロールシャッハの「精神診断学」(1958)や「カウンセリングの理論」(1962)、またロジャースの「サイコセラピーの過程(ロジャース全集第 4 巻)」(1966)などの翻訳にも関わられ、日本の臨床心理学の受容と発展に大きな影響を与えられました。後ほどその当時の状況のようなものをお話しいただけると伺っ

ております。

では、まずは、小泉先生の方からお願いします。

<引用文献>

- 安齋順子 2000a 日本への精神分析導入と丸井清泰： ジョンズ・ホプキンス大学
医学部アーカイブ資料を中心に 心理学史・心理学論, 2, 1-16.
- 安齋順子 2000b 日本への精神分析導入における大槻憲二の役割： 雑誌「精神分
析」とその協力者・矢部八重吉を中心に 明海大学教養論文集, 12, 41-49.
- 安齋順子 2001 日本の「変態心理」と小熊虎太郎： ユング著作の翻訳と開業心
理療法活動の紹介 心理学史・心理学論, 3, 29-36.
- 泉野淳子 2000 心理療法 / 精神療法 / サイコセラピーという訳語をめぐって 専
修大学心理教育相談室年報, 6, 32-39.
- モーズレイ, H. 1876 神戸文哉(訳) 精神病約説 京都：癡狂院蔵
(Maudsley, H. 1872 *Insanity*. J. R. Reynolds(ed) *A system of medicine*. vol2.
(pp.6-68.))
- McReynolds, P. 1997 *Lightner Witmer: his life and times*. Washington, DC: American
Psychological Association.
- 西川泰夫 1995 「心理学」、学名の由来と語源をめぐって：サイコロジは心理学
か 基礎心理学研究, 14, 9-21.
- 小田晋 1980 日本の狂気誌 東京：思索社
- 岡田靖雄 1982 呉秀三：その生涯と業績
- 岡田靖雄 2002 日本精神科医療史 医学書院
- 小俣和一郎 1998 精神病院の起源 太田出版
- 小俣和一郎 2000 精神病院の起源 近代篇 太田出版
- 大泉溥 2003 日本心理学者事典 東京：クレス出版
- 荻阪直行(編著) 2000 実験心理学の誕生と展開：実験機器と史料からたどる日
本心理学史 京都：京都大学学術出版会

- Oyama, T., Sato, T., & Suzuki, Y. 2002 Shaping of Scientific Psychology in Japan. *International Journal of Psychology*, 36, 396-406.
- ライスマン, J. M. 1982 茨木俊夫 (訳) 臨床心理学の歴史 東京: 誠信書房
(Reiseman, J. M. 1976 *A history of clinical psychology*. New York: Irvington Publishers)
- ロジャース, C. R. 1966 伊東博(編訳) サイコセラピーの過程(ロージャズ全集第4巻) 東京: 岩崎学術出版社
- ロールシャッハ, H. 1958 東京ロールシャッハ研究会(訳) 精神診断学: 知覚診断的実験の方法と結果(偶然図形の判断) 東京: 牧書店
- ロールシャッハ, H. 1962 伊東博(編訳) カウンセリングの理論 東京: 誠信書房
- 佐藤達哉 2002 日本における心理学の受容と展開 京都: 北大路書房
- 佐藤達哉, 溝口元(編著) 1997 通史 日本の心理学 京都: 北大路書房
- 下山晴彦 2001 日本の臨床心理学の歴史と展開 下山晴彦・丹野義彦(編) 講座臨床心理学 1 臨床心理学とは何か? (pp. 51-72.) 東京: 東京大学出版社
- 心理科学研究会歴史研究部会(編) 日本心理学史の研究 八幡: 法政出版
- 鈴木朋子・井上果子 2002 日本での精神分析のはじまり(1): 久保良英の貢献 横浜国立大学教育学研究科教育相談・支援総合センター紀要, 1, 101-114.
- 鈴木朋子・井上果子 2003 日本での精神分析のはじまり(2): 大槻快尊の貢献 横浜国立大学教育学研究科教育相談・支援総合センター紀要, 2, 127-139.
- 梅本堯夫, 大山正 1994 心理学史への招待: 現代心理学の背景 東京: サイエンス社
- Walker, N. 1957 *A short history of psychotherapy: In theory and practice*. London: Routledge and Kegan Paul Ltd.
- 八木剛平・田辺英 2002 日本精神病治療史 東京: 金剛出版

注

- 1 「高柳信子教授年譜・研究業績」(人間科学研究(文教大学人間科学部), 21, 17-21. 1997年発行)に基づく。

日本における戦前までの「心理療法」と「精神療法」

小泉晋一（岐阜聖徳学園大学）

今回お話をさせていただく内容は、日本における戦前までの精神療法あるいは心理療法の概念と当時の一般社会での認識のされ方についてです。心理療法や精神療法という言葉は、日本では心理学者が心理療法という言葉を使い、医者が精神療法とよぶ傾向があるのですが、それは戦後になってからのことです。戦前までの心理療法ないしは精神療法は、現代の概念とはかなり異なったものであり、治療方法も大きく違っていました。それならば、どのように違っていたのかということになるのですが、今回は戦前までの日本における心理療法や精神療法の概念や治療法について調べてみました。

泉野先生の研究によりますと、psychotherapy を心理療法と訳することを提唱したのが、医師の井村恒郎です。これは戦後のことです。井村は「精神療法という言葉を使うと、科学的な技術とは縁遠い呪術と似た印象を受ける」という理由から、心理療法という訳語を用いることを提唱しました。つまり、精神療法という言葉には呪術的なイメージが強く誤解を受けやすいので、心理療法という訳語を用いた方が良く井村は判断したわけです。そして、最初は医者が心理療法という言葉を使っていたらしいです。このように、戦後の間もない時期に、医者が心理療法という訳語を用いて、心理学者が精神療法という言葉を使っていたのですが、それがいつの間にか医者がpsychotherapy を精神療法とよぶようになり、心理学者が心理療法というように変化していったのです。

今回の話題提供では、まず初めに戦前の呪術的な精神療法がどのようなものであったのか、それについてお話をさせていただきます。心理療法という言葉を最初に誰が用いたのかといいますと、それは井上円了という哲学者です。井上は東洋大学を創始した人で、当時は哲学館とよばれていました。彼には妖怪博士というあだ名がありまして、妖怪に強い関心を持っていました。妖怪に関心があるといっても、彼は決して心霊主義者でも神秘主義者でもなくて、むしろそれとは正反対の立場にいました。つまり、迷信を撲滅するために不思議な現象を合理的に説明することを試みた人でした。例えば、こっくりさんという現象が暗示によって生じる現象であ

ると説き、靈的な存在の関与を否定しています。また、火の玉は死者の靈魂ではなく、燐が燃えることなどで生じる発光現象に過ぎないと説きました。このように、迷信撲滅のために物理学や心理学の知見を活用して、いろいろな不思議現象を合理的に解明しようと試みました。そして、妖怪学という学問を提唱しました。

この井上円了が日本で最初に心理療法という言葉を使ったわけですが、彼は1904年に『心理療法』という本を著しています。心理療法といっても、井上が使った言葉には生理療法とか薬物療法という言葉もありまして、心理療法という用語は生理療法に対する概念という意味で使用されていました。図1をご覧ください。図1をご覧になるとわかるように、井上が分類した治療法には生理療法と心理療法とがあります。心理療法とは、精神的・心理的な側面を用いて精神や身体の疾患を治療する方法を指す言葉で、生理療法に対する概念でもあります。心理療法は自療法と他療法に分けることができます。他療法は催眠術などを用いた治療法です。自療法は信仰療法と観察法の二つに分けられています。信仰療法には自信法と他信法があります。自信法は自分の病気は必ず治ると心から信じ、その信念によって治していく方法です。他信法は神仏に祈願することによって治す治療方法です。

観察法には自観法と他観法とがあります。自観法は、自分自身の体験する事象を観察することによって心身の治療を行う方法で、坐禅や止観法などが相当します。井上の『心理療法』を復刻させた恩田彰は、森田療法や吉本内観、ヨーガの瞑想法、フォーカシング、自律訓練法などは、自分自身の内面を見つめてくという意味で自観法に通じるものが

あると指摘しています。一方、他観法とは、気分を変えるために旅行をすることや、静かで空気の良いところで静養するなどの転地療法を指し、これも心理療法の一種であると井上

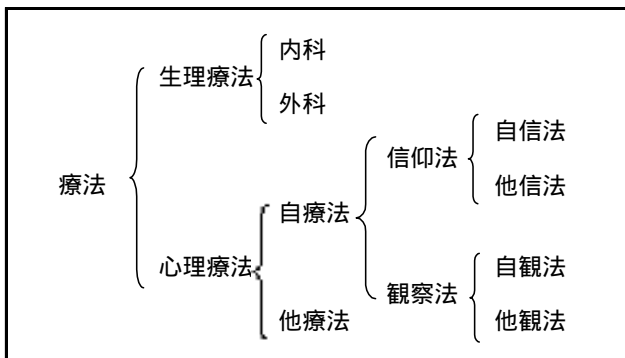


図1. 井上円了(1904)『心理療法』による治療法の分類

は考えていました。

井上円了の影響を強く受けたと考えられる人に、森田正馬がいます。森田は、森田療法という日本で独自の心理療法を創始した人でもあります。森田は呉秀三の門下において、呉からも強い影響を受けています。呉はヨーロッパの精神療法を日本に紹介した人です。森田は、呉が日本に導入した精神療法をもとにして、井上円了の着想を加え、森田療法を確立したとも考えられています。森田の弟子の一人に、先ほど名前があがった井村恒郎がいます。このことから、井上、森田、井村というつながりがあると考えてもよいと思います。そして、この3人はアカデミックな立場から、日本の心理療法に大きな影響を与えた人でもあります。

森田は、精神療法を図2のように分類しておりました。治療法は、まず物質療法と精神療法に大別されます。物質療法には、理学的療法と化学的療法があります。一方、精神療法には安静療法と訓練療法があります。この二つは森田療法の着想につながっていく部分でもあると思われます。それから症候療法があります。症候療法の中には、催眠術や暗示療法があります。催眠術と暗示療法がどのように区別されるのかは、今の視点からはたいへん分かりにくいのですが、当時は明確な区別があったようです。そのほかには、精神分析法、感動療法、水浴療法、マッサージ、信仰、奇跡療法があります。奇跡療法には、呪術とか禁厭、祈祷、太霊道、念射療法が含まれています。奇跡療法に関して森田は、暗示という現象を利用した治療法にすぎないと断じ、奇蹟療法的前提となる霊的な力の存在を否定して、これらを迷信として排除しようとする態度を一貫して持ち続けていました。森田は『変態心理』誌に奇跡療法を批判する論文も掲載しており、中村古峯らとともに迷信撲滅の活動をした人でもあります。森田が確立した精神療法の体系は、アカデミックな場で論じられている精神療法であるということができると思います。

森田は奇跡療法を「迷信」や「通俗精神療法」の名で排除しようとしたわけですが、今から、この通俗精神療法がどのような内容であったかを説明します。表1には、当時、霊術家として著明であった松原皎月による精神療法の分類を載せました。奇跡療法に相当するような精神療法を行う人たちのことを、当時は霊術家とよんでいました。戦前までは松原皎月の他にも霊術家がたくさんおりました。昭和初期には約3万人いたと言われております。この数は、臨床心理士の数よりもはるかに多

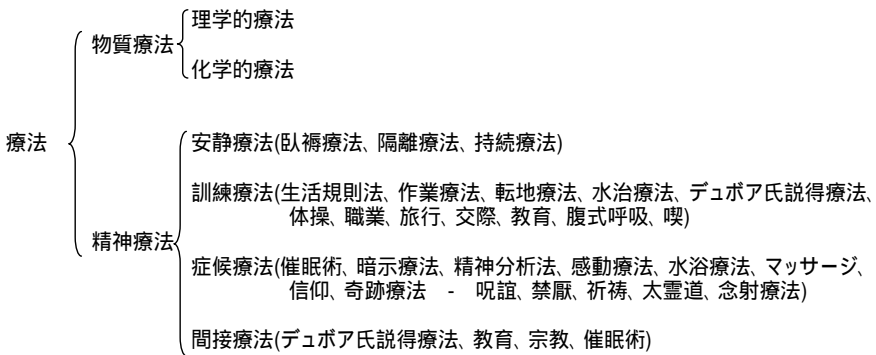


図2 森田正馬(1922)『精神療法講義』による精神療法の分類

いわけです。余談ですが、日本の臨床心理士の姿と当時の霊術家たちの世界を重ね合わせてみますと、さまざまな部分で共通するところが多いように思われます。霊術家たちの著書を読みますと、大同小異、表1のような分類になっておりますので、ここでは松原皎月の分類をサンプルとして取り上げました。

表1では、精神療法の中に心理療法が含まれています。つまり、心理療法は精神療法の下位概念として分類されています。松原は心理療法について、催眠術に基礎をおく暗示法が主な治療手段であると説明しています。当時の「通俗精神療法」の観点からは、精神療法の中に心理療法があって、心理療法は催眠術を応用した治療法であると認識されていたといえます。霊術家たちの著書を読むと、「催眠術と心理療法とは一般的には同じものだと見なされ、混同されているが、それは誤りである」というような書き方のされたものが少なくありません。このことから、当時は一般的には、催眠術イコール心理療法というふうに認識されていたと考えることもできます。

心理療法の内訳は、まずはクーエ式自己暗示療法や精神分析合成療法があります。これらは今でも耳にする治療法です。クーエの自己暗示療法は自律訓練法の着想のもとにもなっているものです。精神分析合成療法は精神分析療法のことです。これらの治療法は現代の心理療法にも関係していますが、これから説明する治療法は現代では心理療法とはみなされていないものです。

表1 松原咬月(1932)による精神療法の分類

1. 心理療法	クー工式自己暗示療法、精神分析合成療法、剃刀療法、マヂナイ療法、熱湯療法、クリスチャンサイエンス療法、霊示療法、稼働無想療法、慰籍歓楽療法、環境転換療法
2. 観念療法	哲理療法、渡辺式心霊治療法、神秘流心力波及術、精神霊動術、自彊療法、熊嶽術、霊智学隠秘教療法
3. 人体放射療法	人体ラジウム療法、霊光療法、靈感透熱療法、プラナ療法、リズム回元術、太霊道靈子療術法、霊気療法
4. 修養療法及び強健術	岡田式静坐法、二木式呼吸法、藤田式調心調和法、清水式精神統一法、相馬式自己催眠法、横井式精神統一法、江間式心身鍛錬法、西式強健術
5. 交霊療法	交霊術療法、天霊術、心源術
6. 理学的精神療法	霊掌術、小山式血液循環療法

例えば、剃刀療法という治療法が心理療法の中に含まれています。これは患部に剃刀を当てて、施術者が気合を入れて病気やけがの治療を試みるというもので、一種の気合術です。クリスチャンサイエンス療法はアメリカで流行した新宗教で、霊的な治療を行っておりました。このような宗教的な治療法も心理療法の一種として分類されています。稼働夢想療法とは、病人に対して「病気は大したことはないのだ、心配するな」ということを告げるものだとして説明されています。慰撫歓楽療法はスポーツや遊興をして気晴らしをすることで、これも心理療法だとみなされています。環境転換療法は、静かなところに行くことや山に登ることで心身の治療を行う方法です。このように心理療法には、精神分析のような現代でも認められている治療法から慰撫歓楽療法のような気分転換や環境転換療法のような転地療法までが含まれており、非常に広範囲な概念であったことがわかります。

次に、心理療法とは別の分類に入れられている観念療法ですが、これは観念の力、あるいは思念によって病気を治す治療法のことを指します。つまり、精神感応あるいはテレパシーという現象の存在が前提にあり、このような現象を利用して患者に思念を伝達し、病気の治療を行います。テレパシーを利用した治療法も精神療法の

一種として考えられていたようです。そして森田正馬などは、このような治療法を通俗精神療法として排除しようとしたのです。

人体放射療法というのは、霊的なエネルギーとして想定されている「気」の力を利用した治療法です。松本道別の人体ラジウム療法や田中守平の太霊道霊子療術法などが当時はよく知られていたようです。修養心理療法及び強健術は、呼吸法や坐禅、精神統一などの実践をとおして、病気の治療を試みる方法です。これらは修養法ともよばれていました。現代ではヨーガや超越瞑想法などを実践している人が少なくないようですが、修養心理療法及び強健術は、ヨーガや瞑想法などの現代でも活用されている心身の健康法に類似したものだと考えられます。交霊療法は、病気の原因に霊的なものの憑依を想定した治療法で、憑依した霊を退散させることが治療につながると考えられていました。理学的精神療法は、整体と気功法を併せたような療術やカイロプラクティックなどを指します。整体やカイロプラクティックは現代でも盛んに行われておりますが、これも精神療法として分類されていました。

松原皎月による精神療法の分類は、精神分析療法のような現代のアカデミックな場で認められている治療法から、ヨーガのような一般社会で活用されている健康法、整体のような代替医療として利用されている療術、心霊治療のような現代の一般社会では受容されていない治療法まで非常に範囲が広いです。これは、当時は精神療法が日本に移入されてきたばかりで、精神療法という概念が未確立であったことが一因であるとも考えられますが、よく考えてみると、それは当時のことに限ったわけではありません。現代でも似たような分類がなされております。例えば、1991年に宝島社から出版された『精神療法と瞑想』という本を読むと、ロジャースのクライアント中心療法やゲシュタルト療法、精神分析療法、エリスの論理情動療法などと並んで、チャネリングやクリスタルヒーリング、中国の気功法やインドのヨーガ、シャーマニズム、カラーセラピー、ロルフイング、アロマテラピーなどが一緒に紹介されています。また書店の精神世界の書棚にも、ユング心理学やカウンセリング関係の本が並べられています。したがって現代の心理療法の分類は、アカデミックな心理学の分類とは違った通俗的な心理療法の分類も存在するとみなすことができます。これは森田が批判した通俗精神療法と同類の治療分類が現代にもあり、アカデミックな心理療法と一般社会で認識されている心理療法との二つの心理療法

が存在しているということを示しています。

戦前には霊術が流行し、霊術家と称する人たちが約 3 万人いたと先ほどお話ししましたが、ここで注意しなければいけないことは、これだけ大勢いた霊術家たちが忽然と姿を消してしまったという事実です。霊術が急速に廃れていった理由の一つは、霊術あるいは精神療法が規制の対象になったことがあげられます。今でも心霊治療や一部の新宗教にトラブルが絶えないように、霊術家のなかには詐欺師のような悪質な人がたくさんいたようで、それが規制の対象となる一因でもあったようです。表 2 には、精神療法が規制の対象となるまでの流れを整理して年表を作ってみました。

まず明治 6 と 7 年には、市子や禁厭や祈祷の禁止令がだされ、いわゆる呪術によって病気を治すことが規制の対象となりました。規制によって生活に困った修験道の行者たちが霊術家のルーツだと言われています。当時の政府は西洋の近代合理主義思想を採り入れることに必死でしたので、近代思想に合致しないものは迷信とし

表2. 精神療法(霊術)が規制の対象となるまでの流れ

1873年	明治6年	梓巫市子憑祈祷狐下ケ禁止ノ件 (教部省第二号達)
1874年	明治7年	禁厭祈祷ヲ以テ医薬ヲ妨クル者取締ノ件 (教部省達第二十二号) 医制発布 (東京大学を中心とした医学教育体制の確立)
1878年	明治11年	漢洋脚氣相撲 (1878 - 1882)
1879年	明治12年	医術開業試験規則、医師免許規則
1887年	明治20年	催眠術ブーム
1896年	明治29年	井上円了『妖怪学講義』 心理療法
1903年	明治36年	催眠術ブーム
1904年	明治37年	井上円了『心理療法』
1906年	明治39年	医師法・歯科医師法の制定 福来友吉『催眠心理学』、「催眠の心理学的研究」で博士号取得。
1908年	明治41年	警察犯処罰令で催眠術が取締の対象になる。
1909年	明治42年	清水芳州 (後に英範)『東京心理協会』設立
1910年	明治43年	桑原俊郎『精神靈動』、福来友吉の千里眼実験
1911年	明治44年	按摩術営業取締規則、鍼術・灸術営業取締規則の制定
1913年	大正2年	福来友吉『透視と念写』 東京帝国大学辞職へ
1916年	大正5年	田中守平、東京麹町に太霊道本院を開院。
1917年	大正6年	中村古峡『変態心理』刊行
1922年	大正10年	清水芳州『精神統一』誌刊行
1921年	大正11年	森田正馬『精神療法講義』
1928年	昭和3年	『破邪顕正霊術と霊術家』(霊界廊清同士会編)
1930年	昭和5年	療術行為ニ関スル取締規則 (警視庁令第四十三号)

て排除されていったのです。医学制度も確立されつつあり、漢方医学も圧迫されました。しかし近代化の波が高まるにつれて、神秘的なものを求める風潮が社会のなかにでできました。それは明治 20 年代に第一の催眠術ブームとして現れました。第二の催眠術ブームは明治 36 年に起こります。催眠術は一見するとたいへん不思議な現象ですので、心霊主義的な神秘思想とも容易に結びつきました。催眠術は科学と心霊学の境にあるマージナルな危うい領域だったのですが、東京帝国大学の福来友吉はこの催眠術を研究して、明治 39 年に『催眠心理学』という本を出し、「催眠の心理学的研究」で博士号を取得しました。催眠術がアカデミックな場で研究の対象とされたのです。

当時は催眠術がかなり流行して、巷には催眠術で治療行為を行う人が多く現れ、トラブルが続出したようです。そのために、明治 41 年の警察犯処罰令では催眠術が規制の対象になります。そのために催眠術による治療を行うことが難しくなり、催眠術師たちは看板を催眠術から霊術に変え、霊術家に転身していったわけです。霊術家のなかに清水芳州という人がいました。彼は明治 42 年に東京心理協会を設立しています。明治 43 年に福来友吉が有名な千里眼実験を行い、翌年 44 年には千里眼事件として社会を騒がせました。大正 2 年になると福来は『透視と念写』を出版し、それがもとで彼は東京帝国大学を辞職することになります。福来の辞職は、心理学にとって大きな影を落とす結果にもなりました。福来は東京帝国大学で「変態心理学」の講座を担当していたのですが、その講座が東京帝国大学の中で廃されてしまったのです。変態心理学は今でいう異常心理学や臨床心理学に近いものですが、福来が東大のアカデミズムを追放されることによって、変態心理学が講じられなくなったのです。この事件によって、日本の臨床心理学が大きく衰退したと考えることもできます。

アカデミズムの場で透視や念写などの霊的な現象、あるいは超心理学的な現象が論じられにくくなった社会的背景に前後して、一般社会では霊術のブームが到来しました。霊術家の田中守平が設立した太霊道や出口王仁三郎の大本教などは、霊術ブームを象徴するかのような繁栄をみせたようです。当然、霊術ブームを危惧する人もいて、中村古峡は『変態心理』誌で太霊道や大本教の批判を徹底的に行いました。このような霊術ブームと霊術批判が交錯するなかで、清水芳州は大正 10 年に

霊術家の雑誌『精神統一』を刊行して、昭和3年に大日本精神医師会を設立したそうです。大日本精神医師会は霊術が国家資格として公認され、霊術家たちが精神医師としての活動を行うことができるように運動を起こす団体でもありました。福来友吉はこの大日本精神医師会の会長になっています。アカデミズムの場を退いた福来は、非アカデミズムな場に立って霊術家たちをバックアップしていたとも考えられます。福来の持つ肩書きの権威や福来の念写の理論などは、霊術家たちが活動するうえでの大きな精神的支柱となったのかもしれませんが。当時の福来の活動内容については資料が入手しにくいので具体的なことがわかりませんが、霊術家たちの運動に福来が及ぼした影響は決して小さくないと思われます。福来の影響については、今後の研究課題としておきたいと思います。

大正期から昭和初期までの間に霊術は大きなブームとなったのですが、昭和5年に霊術や精神療法を規制する法律が制定されました。この法令は東京の警視庁が出したものなのですが、それ以降、神奈川県をはじめさまざまな県で同様の規制がなされます。この昭和5年の霊術に対する規制を機に、霊術のブームは下火になったといわれています。霊術が規制の対象となった理由としては、霊術家に詐欺まがいの人が多く、トラブルが絶えなかったことも一因であるかもしれませんが、それよりも霊術の理論や技法が非科学的であり、迷信を増長するものとして国家の政策に合わなかったことが大きな理由ではないかと思われます。

表3. 『臨床心理学全書』（誠信書房）による心理面接技法の分類

9 巻	精神分析的アプローチ、分析心理学的アプローチ、クライアント中心療法 認知行動論的アプローチ、ソリューション・フォーカスト・アプローチ
10 巻	遊戯療法、箱庭療法、芸術療法、臨床動作法、イメージ面接
11 巻	家族療法・夫婦療法、グループ・アプローチ、心理教育的アプローチ 物語的アプローチ

表4. アメリカ国立衛生研究所による補完・代替医療の分類

伝統医学体系（東洋医学、アーユルヴェーダなど）
心身への介入技法（心理療法、瞑想法、音楽療法など）
生物学に基づいた治療法（栄養補助食品、自然食品など）
身体的な手技技法（カイロプラクティック、マッサージなど）
エネルギー療法（セラピューティック・タッチ、レイキ、気功など）

戦前までの心理療法や精神療法は、現代の概念とはかなり異なったものでありました。現代の心理療法の内容はどのようなものであるかという、それを参考までに表3に示しておきました。最近、誠信書房から刊行された『臨床心理学全書』での分類をあげておきます。なお『臨床心理学全書』では「心理療法」という用語は用いられておらず、「心理面接技法」となっております。この表からは、戦前の心理療法と内容が大きく異なるのがわかります。

最後に戦前の精神療法について一言付け加えさせていただきますと、松原皎月の分類は現代の補完・代替医療の体系に非常によく似ています。補完・代替医療は高額な医療費を削減する目的や近代西洋医学に対する見直しを図るために、アメリカやイギリスなどの先進諸国で注目されており、大学での研究や医療保険の対象にもなっております。アメリカ国立衛生研究所の代替・補完医療の分類を表4に示しておきました。この表からは心理療法が補完・代替医療の一分類に入っていることがわかります。心理療法を相対化してみれば、東洋医学やアーユルヴェーダなどの伝統的な医療体系、カイロプラクティックなどの手技療法、レイキやセラピューティック・タッチなどのエネルギー療法と同列なものであることがわかります。エネルギー療法のなかに分類されているセラピューティック・タッチやレイキは、松原の分類にある人体放射療法そのものとみなしても良いと思います。特にレイキは、大正期に臼井甕男が考案した霊気療法のことで日本の霊術そのものであります。現代の補完・代替医療の分類が戦前の精神療法と極めて似ていることから、戦前の精神療法のなかに補完・代替医療の萌芽を見ることも可能です。また、何を誤りとして何を正しいと判断するのは文化や社会のあり方によって大きく影響され、非常に相対的なものであるともいえます。その判断の基準は、治療効果についての測

定や検証を徹底的に行い、アカウンタビリティを積極的に求めることなどによって得ていかなければいけないのかもしれませんが。現代の日本の心理療法にはこのような視点が欠けているような気がします。今回は日本の戦前までの精神療法の歴史ということでお話をさせていただきました。

<引用文献>

古屋景購 1918 精神療法講義 第2号精神療法研究会

井上円了 1904 心理療法 南江堂

(井上円了著・恩田彰 校閲解説 1988 新校心理療法 群書)

井村宏次 1996 新・霊術家の饗宴 心交社

井村恒郎 1952 心理療法 臨床心理学叢書2 世界社

泉野淳子 2000 心理療法/精神療法/サイコセラピーという訳語をめぐる 専修大学心理教育相談室年報, 6, 32-39.

松原鮫月 1931 霊術講座 洗心会本部

森田正馬 1922 精神療法講義 変態心理学講義録 第3編 日本変態心理学会
(森田正馬1983 精神療法講義 白揚社)

清水芳州 1920 臨床暗示清水式心理療法 東京心理協会

<参考文献>

一柳廣孝 1997 催眠術の日本近代 青弓社

島藺進 2003 <癒す知>の系譜科学と臨床のはざま 吉川弘文館

田邊信太郎・島藺進・弓山達也 1999 癒しを生きる人々 - 近代知のオルタナティブ
専修大学出版局

田中聡 1996 健康法と癒しの社会史 青弓社

日本における C.R.ロジャーズの導入とその広がり方

泉野淳子（品川区教育相談センター）

C.R.ロジャーズ(Carl R. Rogers:1902-1987)と言いますと、臨床心理学や教育界に大きな影響を与えた 20 世紀を代表する臨床心理学者であり、カウンセラーです。戦後の日本の臨床心理学やカウンセリングを語る上で、彼を欠かすことはできないと思われます。戦後 15～20 年間くらいカウンセリングと言えばロジャーズという時代がありました。アメリカで生まれ育ったカウンセリングが日本で隆盛になった経緯、その導入と広がり方について報告いたします（年表も参照）。

戦後 20 年ほどロジャーズ人気が高かったわけですが、なぜロジャーズが流行ったのかを考える前に、どういう経路で入り普及したのかを整理してみようと思います（図 1）。いろいろな情報が沢山ありまして、年表でも大切なものが落ちている可能性も無きにしもあらずですので、他にも情報等ありましたら、ぜひお教えいただきたく思います。まとめていく上で大きく二つのルートがあるかと思われる。一つはアメリカ主導型、もう一つは個人主導型と名付けてみたいと思います。

まず一つ目のルートとしてアメリカ主導的なもの。1948 年、東北大学の正木正氏が I F E L の講師 A.J.ジャーシーールドから学んだということ。この I F E L は、戦後、GHQ の下部組織、特別参謀部の情報教育局 C I E が主催して、48 年～52 年まで行っていたもので、日本の戦後の指導者を教育する、教育改革のために民主的な教育指導者を育成する目的で設置されたものです。大学の先生、教育委員会、教育研究所等の指導者を対象に行われていました。ここで、アメリカの教育学や心理学が伝えられる中で、正木氏は初めてロジャーズを知り、大変な関心を持ったということです。5 年後に彼は著書『教育的人間』の中でロジャーズを紹介しています。

アメリカ主導的なものともう一つ、49 年の伊東博氏のガリオア留学生としてのアメリカ留学があります。これはアメリカの占領地救済政府基金が基になっているもので、敗戦国の日本とドイツに対してアメリカが資金を提供した、その一環としての留学生派遣であり、伊東氏は第 1 回のガリオア留学生としてミズーリ大学でロジャーズの著書をテキストとして学んで来ています。それを帰国後の 52 年に『カウンセリング』として著しています。

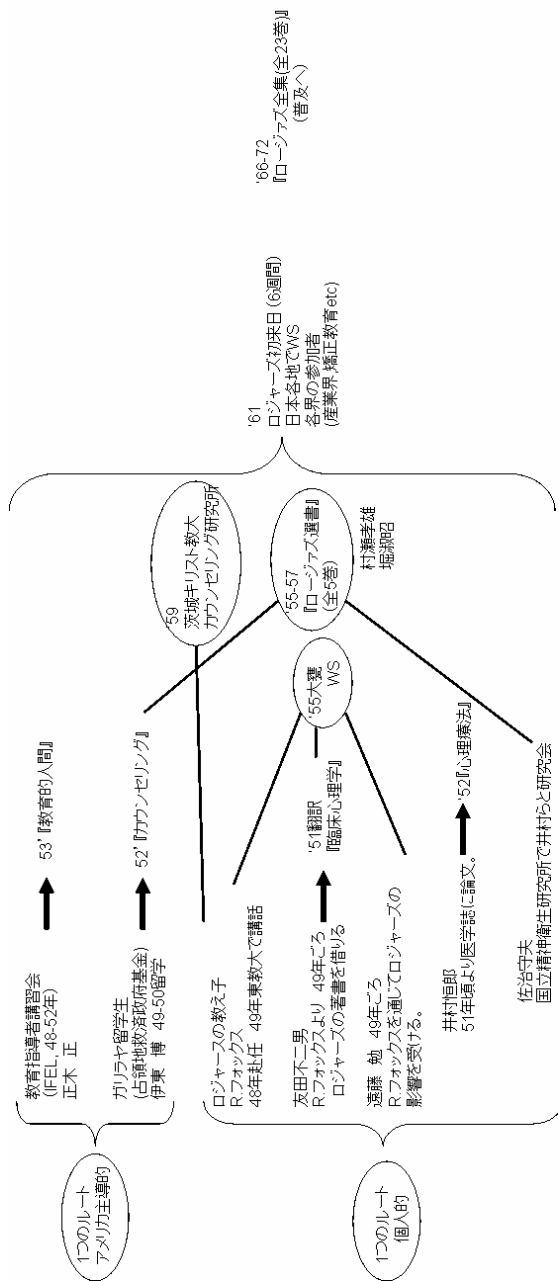


図1 ロジャースの導入と伝播

I F E L等の影響力を考えますと、日本の教育分野の指導者たちがアメリカの教育や心理学を学んだ、そこに当然ロジャーズも入っているわけですが、そこから高校、小・中学校の先生たちへと伝わり、現場の先生たちが児童生徒を指導したり、家庭訪問などをして保護者と話をする際の現実的な技法として利用されていったであろう流れが一つ考えられます。

もう一方のルート、個人が自ら関心を持ち学んでいった経路として、茨城キリスト教短大のR・フォックス氏の周りに集まった人たちのルートがあります。1949年の秋、同短大のフォックス氏は東京教育大学の心理学科からアメリカの心理学の状況を話してくれるよう依頼されて講話をしています。その時に伝えられたのが、ロジャーズとバージニア・アクスライン、彼女はロジャーズ派のプレイセラピーの第一人者ですが、その二人について話をしています。当時、教育大で助手をしていた友田不二男氏がフォックス氏の話聞いて大変関心を持ち、講義の後でもっと知りたいと話しかけて、それならばロジャーズの原著を貸してあげようということになり、その後『Counseling and Psychotherapy』（1942）を貸したという記述があります。ちなみにこの本はロジャーズの出世作という風に言われているもので、この中に「The Directive Versus the Nondirective Approach」という章がありまして、それで non-directive という言葉が非常に一人歩きをした。指示的か非指示的かということが書いてある本です。51年にこの本を友田氏が日本で初めて翻訳し、『ロージャーズ 臨床心理学』として発行されました。

フォックス氏はシカゴ大学時代、ロジャーズのもとで学んだことのあるロジャーズの教え子です。ただし彼は心理学者ではなく聖職者です。シカゴ大でのロジャーズの授業の進め方等については印象深いものがあつたようです。フォックス氏の周りに友田氏や、茨城中央児童相談所で働いていた遠藤勉氏らが集まって来ます。遠藤氏は当時、長期学校欠席児や非行をくり返す子どもたちと話をしようとしても、最初に会った時はまあ、子どもは話を聞いてくれる、その時には道德論とか倫理観を話すしかなかった、「こんなことをしてはいけない、あんなことをしてはいけない、学校に来てきちんとやらなければいけない」といったお説教めいたことを話すしかなくて、それ以降は家庭訪問すると子どもたちは逃げてしまう。逃げ回る子どもたちを追いかけて話をせざるを得ないような状況であった。そんな時にロジャーズの

教えは、「渴者が水を得たほどの思いで彼の論文を熟読した」と書いておられます。

フォックス氏の周りにロジャーズに関心を持つ人たちが集まり、カウンセリングや彼の考え方等について研究が重ねられていました。そして、55年、友田氏、遠藤氏らが中心となって、茨城キリスト教大学の学長になっていたフォックス氏の協力のもと、茨城県大甕で「非指示的カウンセリング討論会」、カウンセリングのワークショップが開かれました。10日間にわたって全国から40～50名の参加者があったということで、このことは一つ、ロジャーズが広まっていく大きなポイントであろうと思います。この時の参加者のうち、東京在住者によって東京カウンセリングセンターが設立され、地方からの参加者は全国に散らばって各地でカウンセリング研究会を開いていきました。それが表1。発足された年度順になってはいますが、確かな年度が分からず割愛したものもあります。これは久能徹氏の本から引用しました。日本各地に研究会が広がっていく様子が見て取れます。

表1. 久能徹(1996)による、各地に発足したカウンセリング研究会

1957年	青森カウンセリング研究会(青森市) 神奈川カウンセリング研究会(横浜市) 愛知カウンセリング研究会(岡崎市) 名古屋カウンセリング研究会(名古屋市)
1958年	産業人事相談研究会(東京都; 61年に日本産業カウンセラー協会関東支部となる)
1959年	京都カウンセリング研究会(京都市) 神戸カウンセリング・センター(神戸市) 関西産業カウンセラー協会(守口市; 61年に日本産業カウンセラー協会関西支部となる)
1960年	近畿学生カウンセリング研究会(大阪大学学生部) 山口カウンセリング談話会(山口市)
1961年	阪神カウンセリング研究会(尼崎市) キリスト教学校教育同盟関西地区カウンセリング研究会(関西学院高等部他) 大津カウンセリング研究会(大津市) 香川カウンセリング研究会(高松市) 高知カウンセリング研究会(高知市)
1962年	四国カウンセリング研究会連合会 札幌カウンセリング研究会(札幌市) 盛岡カウンセリング研究会(盛岡市) 茨城キリスト教学園カウンセリング研究会(日立市) 広島カウンセリング研究会(広島市)
1963年	弘前カウンセリング研究会(弘前市) 徳島カウンセリング研究会(徳島市)
1964年	沼津カウンセリング研究会(沼津市) 岡山カウンセリング研究会(岡山市)
1965年	川崎カウンセリング研究会(川崎市)
1966年	北海道カウンセリング研究協議会

カウンセリング人気というのは、この 55 年のワークショップ以降であろうと思われ
ます。55 年から 57 年にかけて『ロジャーズ選書』全 5 巻が翻訳発行されます。

『Counseling and Psychotherapy』(1942), 『Client-centered Therapy』(1951) の
2 冊が 5 巻に分けられ、友田不二男氏、伊東博氏、堀淑昭氏、村瀬孝雄氏、佐治守
夫氏の 5 名によって訳されました。

そして 61 年、ロジャーズが初来日しまして 6 週間にわたって全国 5 か所でワー
クショップが行われました(表 2 参照)。1 か所で 1 週間程度、30~120 名位まで
のグループがありまして、参加者も多彩でした。第 1 回目は京都大学で、2 回目は
産業訓練協会、産業界、大企業の中堅の管理職たちのグループ、3 回目は法務省、
検察官、保護監察官たち、4 回目が茨城キリスト教大学、それまでフォックス氏を
軸に集まっていた人たちが中心となって開かれました。これには全国から 120 名が
参加するという大規模なものとなりました。そして 5 回目も産業界の主催で行われ
ました。このワークショップで直接ロジャーズに触れ、他にも学びたがっている人
が大勢いることを互いに知ったことが、その後のロジャーズ人気にも影響があつた
だろうと思われます。そして、66 年~72 年にロジャーズ全集全 23 巻が新たに翻訳
に手が加えられて発行されました。

表 2 1961 年初来日したロジャーズによるワークショップ

-
1. 京都大学で開催。有名な禅師と会合する。
 2. 東京の品川プリンスホテルで開催。日本産業訓練協会主催。参加者は大企業の中堅管理職た
ち約 30 名の小さなグループであった。
 3. 法務省で開催。検察官、保護監察官、犯罪学者たちを対象とする。
 4. 茨城キリスト教大学で開催。1955 年に開かれた第 1 回非指示的カウンセリング研究検討会
の第 7 回目の年次大会に招かれる。
 5. 神戸市の六甲山で開催。日本産業訓練協会の主催。最終日、松下電器の工場で講演する。
-

個人的なルートのもう一つとして、精神医学者の井村恒郎氏は欠かせないと思わ
れます。1951 年、当時、国立東京第一病院の精神科部長をされていた井村氏ですが、
精神医学の世界で多くの業績を残された方で、もともと大脳病理学、その後、失語
症、戦争神経症、分裂病家族の研究をされました。フロイトの著書も翻訳されてお

り、今日の精神医学の礎を築いたお一人ですが、その彼は、医師を対象とした学術誌「診断と治療」(1951年9・10月)にロジャーズの非指示的療法を紹介しています。

そして52年、国立精神衛生研究所に移った井村氏のもとに臨床心理学者の佐治守夫氏らがいたわけですが、ここで井村氏を中心とした研究会が行われており、サリヴァンやロジャーズについて徹夜で議論をし合ったこともあると佐治氏が書いています。それですので、国立精神衛生研究所でもロジャーズ研究がなされていたと見なせます。井村氏は『心理療法』(1952)を著し、この中でロジャーズについて論述しています。ご参考までに、戦前からある精神療法という言葉を変えて、心理療法という言葉を使い始めたのは井村氏です。ロジャーズの本を51年、日本で最初に翻訳発行した友田氏はpsychotherapyを精神療法と訳しています。精神療法という言葉は精神医学者が使い、心理療法は心理学者が使うというイメージがありますが、実は訳出された頃は逆でした。

1973年、井村氏は定年記念最終講義でロジャーズについて語っています。「ドクターが権威をもって患者に指図するのは違う逆の方法」としてクライアント中心療法を紹介し、共感能力の大切さを若い医師の卵たちに向かって説いています。ロジャーズがクライアントを中心に据えて、クライアントと対等の立場に立とうと続けたこと。「ドクターは別に権威があるわけではない。患者を見下すのではなく患者を中心に患者がどういう気持ちでいるか」そういった共感が大事なのだと言っています。井村氏にとってロジャーズは最後まで意味のある存在だったようです。

以上、まとめますと、まずアメリカ主導によるものかどうかで大きく二分され、さらに個人主導的な中にも、アカデミックなルート、一般市民の草の根的なものがあり、それらが互いに影響し合い、交流し合いながらロジャーズ隆盛の時代があったであろう、ということをもとめとして終わりに致します。

文献

保坂亨・浅井直樹 1997 「日本におけるクライアント中心療法」 こころの科学

74 日本評論社 pp.59-63

伊東博 1995 『カウンセリング(第四版)』 誠信書房

- 井村恒郎 1984 『井村恒郎著作集3 分裂病家族の研究』 みすず書房
- Kirschenbaum H. & Henderson V.L. (eds.) 1989 Carl Rogers Reader.Constable
- 久能徹 1996 『ロジャーズとロジャーリアン』 日本カウンセリング・センター
- 久能徹・末武康弘・保坂亨・諸富祥彦 1997 『ロジャーズを読む』 岩崎学術出版社
- 倉石精一他 1982 「第二編 戦後わが国心理学の展開」『日本の心理学』 日本文化科学社 pp.127-286
- 小谷野邦子 1998 「日本の敗戦と心理学の再出発」『日本心理学史の研究』 京都法政出版 pp.72-116
- 間宮正幸 1998 「日本の臨床心理学の発展」『日本心理学史の研究』 京都法政出版 pp.117-138
- 諸富祥彦 1997 『カール・ロジャーズ入門』 コスモス・ライブラリー
- 恩田彰 1992 「わが国の心理臨床のはじまり」『心理臨床大事典』 培風館 p.1225
- 佐治守夫・伊東博・友田不二男他編 1968 『ローギアズ全集 18 わが国のクライエント中心療法の研究』 岩崎学術出版
- 佐治守夫 1983 「井村恒郎先生を偲ぶ」『井村恒郎著作集別巻・人と学問』 みすず書房
- 佐治守夫 1996 『カウンセラーの<こころ>』 みすず書房
- 佐治守夫・岡村達也・保坂亨 1996 『カウンセリングを学ぶ』 東京大学出版会
- 下山晴彦 2000 「わが国における臨床心理学の歴史」『臨床精神医学講座 special issue 第5巻』 松下正明編 中山書店
- 下山晴彦 2003 「臨床心理学とは何か」『よくわかる臨床心理学』下山晴彦編 ミネルヴァ書房 pp.2-23
- 友田不二男 1955 『精神療法』 ローギアズ選書2 岩崎書店
- 友田不二男 1956 『カウンセリングの技術』 誠信書房

1948(s23) ロジャーズ、日本に紹介される。東北大教授の正木正（まさし）は、「教育指導者講習会（IFEL）」第1回目の講師A.ジャーシールドからロジャーズに関して学び、関心を抱く。東京文理科大（現筑波大）教育相談部主任の友田不二男は、ロジャーズの教え子だった茨城キリスト教短大（現茨城キリスト教大・シオン短大）のR.フォックスを通してロジャーズの見解を知る（友田はそれを1948としているが、フォックスは1949と書いている）。

1949(s24) R.フォックスは東京教育大学（現筑波大）心理学科から依頼を受け、ロジャーズとV.アクスラインに関して講演をする。その後、友田不二男はR.フォックスから、ロジャーズの『Counseling and Psychotherapy』（1942）を借りて読み感銘を受ける。

伊東博はガリオア留学生としてミズーリ大学大学院に派遣され、翌年、日本人として初めてカウンセリング領域における修士号（Master of Education in Guidance and Counseling）を取得して帰国。同大学院で、教科書としてロジャーズ（1942）を読み感銘を受ける。

1951(s26) ロジャーズの『Counseling and Psychotherapy』（1942）初めて翻訳発行される。タイトルは『臨床心理学』（友田不二男訳、創元社）。

精神医学者の井村恒郎（つねろう）は論文「精神療法の前提」の中で非指示的療法に言及し解説する。

1952(s27) 伊東博、ミズーリ大学院で学んできたことをまとめ、『カウンセリング』（東洋書館）として発行する。

国立精神衛生研究所が創立され、井村恒郎の下で働く佐治守夫は、井村を囲みスタッフらとともにロジャーズやH.サリヴァンの方法について研究会を重ねる。

国立精神衛生研究所に移った井村恒郎は、著書『心理療法』（世界社）の中で、ロジャーズの非指示療法およびクライアント中心療法を取り上げて論説する。

『ガイダンスのための面接技術』（友田不二男、金子書房）発行される。

1953(s28) 京都大学教授の正木正はロジャーズの見解を評価し、その方法を教育の分野に導入するための理論的な可能性を『教育の人間』（同学社）の中で著す。

1955(s30) 国学院大助教授の友田不二男と茨城県中央児童相談所の遠藤勉が中心となり、茨城キリスト教大学長R.フォックスの協力の下、非指示的カウンセリング研究討論会が同大（茨城県大甕）で10日間にわたって開かれ、全国から40-50名が参加する（以後、63年まで合計30回以上開催される）。参加者のうち東京在住者により、東京カウンセリング・センター（現財団法人カウンセリング・センター）が設立される。

- 同上 (s30) 『Client-centered Therapy』(1951), 『Psychotherapy and Personality Change』(1954)が『ロージャーズ選書(全5巻)』(『1 カウンセリング』『2 精神療法』『3 遊戯療法・集団療法』『4 人格の心理と教育』『5 人格転換の心理』)として、岩崎書店から翻訳刊行が始まる(～1957年)。(訳者は友田不二男。5巻のみ友田に加え、伊東博・堀淑昭・村瀬孝雄・佐治守夫が共訳)
- 1956(s31) 京都大学の佐藤幸治はシカゴ大学のカウンセリング・センターを訪れロジャーズと会う。
『カウンセリングの技術』(友田不二男, 誠信書房)発行される。
この頃、東京都江戸川区教育相談所ではロジャーズの方法を実践し成果をあげる。
- 1957(s32) 友田不二男はシカゴ大学のカウンセリング・センターに5か月間滞在し、ウィスコンシン大学にロジャーズを訪れるが、期待していたような人物とは違ったので落胆する。
- 1959(s34) 茨城キリスト教大学にカウンセリング研究所が開設される。
『カウンセリング入門』(伊東博, 誠信書房)発行される。
- 1960(s35) R.フォックス, ウィスコンシン大学のロジャーズを訪れ、日本におけるカウンセリングの状況などを伝え、翌年の来日の約束を取りつける。
- 1961(s36) ロジャーズ初来日する。法務省・日本産業訓練協会・茨城キリスト教大学の共催のもと、6週間にわたり京都・東京・茨城・神戸の各地でワークショップを行う。
- 1963(s38) 遠藤勉, 半年間ウィスコンシン大学のロジャーズの下で学ぶ。
- 1966(s41) 『ロージャーズ全集(全23巻)』(岩崎学術出版)の刊行始まる(～1972年)。編集には、『ロージャーズ選書』の翻訳者だった友田・伊東・堀・佐治の他に新たに畠瀬稔(臨床心理学)と村山正治(臨床心理学)が加わった。
『新訂・カウンセリング』(伊東博, 誠信書房)発行される。
- 1967(s42) 京都女子大の畠瀬稔, カリフォルニアの西部行動科学研究所に移ったロジャーズの下に2年間留学する。
- 1972(s47) 九州大学の村山正治, 西部行動科学研究所のロジャーズの下に1年半留学する。
- 1973(s48) 日大医学部精神神経科教授の井村恒郎は、定年記念最終講義の中でロジャーズの方法について好意的に言及する。
- 1974(s49) 友田不二男, 参院選に立候補し、「教育の刷新・変革」などを訴えるが落選する。
- 1975(s50) 第1回PCA(Person-Centered Approach)に参加した平木典子(立教大学), 都留春夫(国際基督教大), 小谷英文(広島大学)が、日本精神技術研究所のシンポジウム「最近のカール・ロジャーズ」でその姿を伝える。この3人に佐治守夫が加わり、日本でのPCAが行われる。

臨床心理学私史

高柳信子(文教大学)

当時の臨床心理学の状況

ロジャーズの話があったんですが、ここに出ております事柄の過程に私は参加しておりました。私どもはフォックスさんではなくてローガンさんと言っておりました。資料はございませんが、通らざるをえないところで、ちょっと付け加えさせていただきます。

伊東博先生のガリオア留学生のところで、伊東先生が『カウンセリング』という本を帰国されてから出されたんです。文献で調べればわかるんですが、これが全然、売れなかったんですね。この教科書を使って勉強するということはありませんでした。むしろロジャーズの翻訳が出てから、一挙に噴出したということが現実的だったと私は思っております。伊東先生はもともと折衷派の方でいらっしゃる。それは自称されておられて、ご自分のカウンセリングもそのようにやっておられました。帰国されてから企業などのカウンセリングもやっておられましたけど、折衷的なカウンセリング。その先生がある時から友田先生とつながりができ、ちょっと client-centered の方に共感を示されて、お二人で仕事をなさることが多くなりました。もともとは折衷派でありまして client-centered はなさらない、結果的にはなさってないと思います。面接のことを研究会で勉強したことがあるんですが、やはりちょっと違いました。

茨城キリスト教短大で一つのきっかけとなった人物がローガンさんですが、心理でもありませんし、もともと宣教師さんです。ただ弟子であったことがあるというのと、本のことがきっかけで、いろんなことが起こったんです。ワークショップも毎年参加しておられて、一時、大衆参りという言葉も流行ったんですね。毎年、夏のワークショップに10日間泊まり込みました。学んだことを家に帰って実行して、家に帰ると何だかわかんないけど、お父さんちょっと変わったと。そういう事実の話はいろいろ聞かされました。

けれども、ローガンさん自身、日本が思いがけずにこんなに盛り上がってしまったので、ご心配になられまして、ある時、「自分は正確にロジャーズを伝えただろう

か」と、ちょっと不安をお漏らしになったことがあります。そんなこととは関係なく一人歩きして日本の専門家たちの中で突っ走ってきたわけです。

井村先生は国立精神衛生研究所の心理学部の部長でいらしたことがあります。心理学部では医者は先生だけで、あとは心理の人だけでした。心理の立場に非常にご理解のある部長でいらっしゃいました。私も国立精神衛生研究所に所属したことはあったのですが、井村先生とは入れ違いでした。私が所属していたころは加藤清明先生という後に東京医大の精神科医の先生の時代でございます。加藤先生は自殺の問題で有名で、新聞を賑わすような自殺の事件があると、すぐマスコミから電話が入るんです。同じ部屋にいるのでわかるんですが、電話がかかってくると、加藤先生がお尻をかきながら一生懸命話されていたことを今でも覚えております。

私は、臨床心理は大学でも習っておりませんし、実習も訓練を受けたことはございません。教える先生もおられませんでした。そのころの心理学専攻の先生は、まさに伝統的な基礎心理学とか、実験心理学とかの先生で、たとえば平野先生とか、相良先生とか、東先生、動物心理学の森敏先生でございました。そんな時代の心理学専攻者ですので、今では、かりそめにも臨床心理士や日本カウンセリング学会の認定カウンセラーの資格をいただきまして、そういうことを大学で教える立場になっております。臨床心理学の最初のころは、カウンセリングや臨床心理学って一体なにということからわからなくて、悪戦苦闘して、実践をやっておりました。その後、時間を経まして、徐々に概念化・理論化・体系化し、『臨床心理学』という本が出たり、徐々にそういう体系がはっきりしてきたような印象があります。

そんなわけで、私が臨床に関わり始めた最初のころは、臨床心理学の全くの草創期なのでありますが、そのすべてをここでご紹介すると時間が足りません。そこで、2つの点から述べてみようと思います。1つ目は、臨床心理学といいますが、学としての臨床心理学と臨床実践としての臨床心理学、両方の側面があると思いますので、この両方の側面から。2つ目としてはそれぞれについて公的な動きと私的な動きがまるで違いましたから、そのへんからも比べながら、論じてみようと思います。

当初は、体系がしっかりしていたわけではありませんから、私もわからなくて、それこそ「ラポールって何ですか？」なんて、佐治先生にお聞きしたりしたんです。

先生はニヤッと笑って何も教えてくださらなかったんです。それは意地悪で教えなかったのではなくて、安易に教えてくださらなかったからよかったのではないかと今になれば思います。というのは、後で気がついたんですが、先生は専門家で先端を行ってらっしゃいましたから、もちろん、私に説明はできるわけです。そのとき答えられなかったのは「専門に研究しようとするものが、なんでそんなことを人に聞いて教えてもらうのか」というメッセージではなかったかと思いました。それから、悔しさもありまして、自分なりに勉強するようになったわけです。これがまた一つの先生としての client-centered という、教育の方からいきますと、学生中心のという、生徒中心という言葉もありますけれども、結果的に、計画的にはないと思います、そういうタイプだったと理解したわけです。

国立精神衛生研究所と県の中央精神衛生相談所と大学教育の状況

さて、トピックとして一つ、私は国立精神衛生研究所とある県の中央精神衛生相談所というところでお世話になりましたのでその2つの様子について述べたいと思います。国立精神衛生研究所は、国立で唯一の専門機関でありましたから、国としてやるのがどうであったかということを知る一つの手掛かりになります。もう一つの中央衛生相談所は、ある県に日本で2番目に本格的にできました中央精神衛生相談所でした。それもいわば公立ではありますが、そこに臨床心理技師という職名を拝命しまして行ったんですが、地方自治体の一つのモデルではないかと思って、そこでのことをお話ししようかと思います。その後、大学ですが、大学も私が行った当初は、臨床心理学は一つもありませんでしたので、最初は家政学部、児童学科に奉職したわけです。ところがそこでの心理は水島恵一先生をはじめほとんど臨床に関係あるものばかり集まりました。水島先生を中心とする人脈が集まったわけで、児童学科であろうが、児童学であろうが、児童心理学、臨床心理学なり、演習は臨床実習をやりまして、私どもが出先で臨床の仕事をする時、授業の一環として学生を指導したり、昭和44年くらいから始めていました。まだ大学として認知されたところは何もありませんで、勝手にやっていたわけです。相談業務をやっている、その頃は親御さんが障害児のお子さんをおんぶして両手つないでお二人、全員障害児という状態で、2時間かけて通われたりしないと専門機関とか頼るところが

なかったという時代でした。

国立精神衛生研究所について

国立精神衛生研究所は研究所ではありますが、精神衛生法という法律に基づいてつくられた唯一の国立の機関であったわけです。昭和27年(1952年)に精神衛生に関する地域研究を行う厚生省の講習衛生局の付属機関としてできたものです。この時に、津川先生が書かれていますが、そこに心理学部が最初からあったんです。心理学部に老年心理学で片口先生と佐治守夫先生が創設の最初からおられました。片口先生はもともと少年鑑別所におられました、そこに来られたわけです。あとは生理学形態学部とか、優生学部、児童精神衛生部とか社会学部とかありまして、広い意味で医療行政の一環ですので医者が中心で、部長クラスはほとんど心理学といえども精神科医であったわけです。ただ社会学部は社会学の横山定雄先生が部長で例外的でありました。佐治先生がロジャーズの理論的な研究、その発表とか臨床、研究と実践の導入に努力されてきました。

私がこうして出させていただいたのは、実は私がいろいろお世話になりました先輩の臨床心理学者の先生方が故人になられて、ここで来て話していただくことができないのと、お会いすることができなくなってしまいましたことと、関西と関東とは何やら違うらしいというお話なんですね。ということと、経過として私が古い方になったので、お伝えすることになった。片口先生も故人になられましたし、もう一人、玉井収介先生という方は子どもの臨床の専門の方で、当時自閉症の問題が盛んに研究テーマになっていた頃で、玉井先生も臨床がご専門でした。ただ心理学部ではなく、児童精神衛生の方におられました。心理学部は先生が二人おられたんですが、あとの部はそれぞれ一人ずつですね。大人と子ども、どちらかという心理学は大人の対象者、子どもは児童の方の先生という関係がありました。研究などで共同研究で、子どもの研究とかやったことはあります。この3人が臨床心理で指導を受けました。

52年に設立されまして1960年になりました時、学部という表記を中身を変えませんでした、名称変更が起こったんです。学というのをとって部としました。心理学部は心理部となっていりわけですが、どういうわけか、それを機会に心理部にならず

に心理学部がなくなっていました。その時期は頃合いとしてそろそろ心理学部であれば佐治先生が学部長になられてもいい時期だったんですが、医者の世界に囲まれていると心理は厳しいです。今でもそうですが、残念に思いますが、後にお二人とも大学に出られて教授になられましたから、現状は精神衛生法自体が二転三転変わって、精神衛生法が精神衛生保健法となりました。その次には精神保健福祉法、複雑になって広がってまいりました。ということもあってしましただけで、前から15か年計画があったんですが、昔あった国立精神衛生研究所のような体質、組織、建物、運営ががらっと変わって、今、建物もなくなったが、なくなるはずですよ。よく言えば発展的に解消して大きくなったということになります。

臨床心理学的な学習体験はどんなことがあったか。これも別にきちんとした、決められた大学教育のようにカリキュラムがあって、時間割があって勉強があって棚ぼたのようだという条件設定はございません。皆、自発的に、必然的に個人的にも勉強したのが実態です。その中身として一つは研究所ですので、先生もご一緒になって心理を中心に文献研究や紹介をやりました。勉強会ですけれども主には英文の文献だったかと記録しています。日本の研究の紹介も多少ありました。心理テスト、投影法を含めまして一つはテストを使って、テストについての研究論文とか、テストをめぐるの文献研究、もう一つは心理治療とかカウンセリング、事例研究、特に事例と言いましても症例研究が大きかったと思います。研究所の隣に国立国府台病院がございまして、そこに精神科医がおられ、そこでの交流も多少ありました。そこの河村先生という精神科医がおられたんですが、研究室にお出でになって雑談したり、大変ありがたかったのは分裂病を弁別するロールシャッハの統計的な手法を使って研究したものがあつたんですが、その時の判別関数などを統計的なことを河村先生が片口先生のところに来られて伺ったりしました。

臨床実践の方では、研究所には後には精神衛生相談室ができたんですが、精神科医がおられるので患者さんが紹介されたりしてきて、患者さんの相談が細々と始まりました。そこに訪ねてこられた、私が初めて受け持ったイニシャルケースは、強迫神経症の患者さんのカウンセリングでした。何十年の前の話ですが、本人も50、60歳になっていると思いますが、当時大学生で、『7人の死刑囚』を見てから不安が嵩じて、自分が人を殺すのではないかと、当時大学1年生で、妹さんと下宿し

ていたんですが、妹が隣に寝ていたりすると自分が殺してしまうのではないかという強迫観念にとらわれて登校できなくなった大学生でした。生まれて初めて担当したのが、そういう事例でした。佐治先生がスーパーバイザー的にいらっしゃるわけですが、スーパービジョンということはそういう時代ではありませんでしたから、自分で一生懸命やるしかしょうがない。研究所でしたから、研究もやっていたわけですが、このカウンセリングの経過を私がQテクニクか何かで変化を追って調べたのがありまして、ロジャーズ流の考え方でやって、9回くらいで終わったんですが、その分析をして発表したことがあります。

あと家族の対人関係の問題で本人が神経症になってるような事例のカウンセリングをさせていただいたり、当時、アルコール依存のグループ心理治療をやっていたことがあり、そのグループに参画させていただきました。アルコール依存の問題はこの後、精神衛生相談所でアル中の患者さん、ご家族の相談が圧倒的に多いんですが、その時もテストとかやって私なりに伺ったのは、アル中の患者さんは飲んでない時は普通に「あのご主人がそんな乱暴なんですか。奥さんが悪いんだ」と思われていました。奥さんをその時に調べて、私なりの研究で私なりに感じたことは、奥さんははたから見れば、そんなに手に負えないご主人ならさっさと別れた方が建設的ではなからうかと思えるくらいご苦労が多い。奥さんも訴えるわけですから。ところが「この人は私がいなければだめなんだ」という側面がとらえられたということがありました。このように精神衛生研究所以外でも、外部で某私大の医学部の精神科外来でロールシャッハテストをさせていただくことがあります。TAT、鬱病の患者さんの治療を担当したりしたことがありました。これは結果的には無給で勉強させていただきました。

それから研究会は東京ロールシャッハ研究会を設立されまして、研究内外の研究者で研究会をやりまして、ロールシャッハの著書である『精神診断学』の翻訳を皆でやりまして出版いたしました。テストを2回やる時の同じ図版を使いますと影響がでるということで、平行シリーズがあるんですが、それを日本版として片口先生がおつくりになり、片口先生とロールシャッハからとりまして「カロシリーズ」として図版を検討してデータをとったりして『Psychopsy : manual for Ka-Ro inkblot

test』(1970)という本が出ております。私なんか見習い学習でして、今だったら学生さんは研究上の手伝いをしてもらうというアルバイト感覚だと思いますが、それこそ佐治先生の面接テープの逐語記録をつくるんです。逐語ですから概要ではありませんで、ハアとか、沈黙がどれくらいとか、細かいところまで全部逐語で記録をつくって、今だったらコピーで簡単ですが、昔はガリ版と言いまして、鉄筆で文字を書いて印刷は謄写版という時代でした。それが勉強になりましたね。見習いで教えてもらうというより盗んで覚えるという感覚でした。教えられることも「100回テープは聞き直せ」と。問題とか課題中心ではなく、もっと人間の心中心、相手中心というカウンセラー、治療者とクライアント、患者の等価性、平等性、基本的な信頼と尊重を概念としてではなく、自分としたりどういうふうにすることが、そうなのかというものをいっぺんにはわかりませんでした。経験を積んでいく中で気がついていくようになりました。片口先生は感性の鋭い片で臨床家としても優れておられて、研究者としても論理性の高い方で、びっくりしたのは、臨床の感性が鋭い方で、研究の中で私が絶対に計算は間違っていないと思っていたものに対して「こんなはずはない」と指摘されることがあったりして、臨床経験の方が先で、数字が先ではないと。最近の臨床経験はへたすると数字の一人歩きが目立って気になりますし、人間に役に立つ研究を臨床家としてどういうふうにしたらできるだろうかということで、自分のために役に立つ研究とか、自己満足の研究は簡単なんですけど、そのへんを未だに悩んでおります。

県の中央精神衛生相談所について

精神衛生相談所ですが、戦後、赤線地帯という、ご存じないかと思いますが、生活苦から売春婦が増えたわけです。その時に性病相談所をつくりました。それがひとしきりたった後に、神奈川県精神衛生の課長が「これからは心の問題だ」と。それを廃止しまして、新たに中央精神衛生相談所をつくることにしたわけです。医師が一人、ワーカーが二人、そのうちの一人は県の保健婦さん、婦長レベルの方、心理は私一人ということで、保健婦さんはすぐにワーカーの研修に出されまして、ソーシャルワーカーと私と、医師の一人は県の課長が所長でしたから、常勤の医師が代行していました。外側は残っていますが、中は全部整理したのはいいんですが、

きれいに整理してくれればいいのですが、医療器具にしても棚にしてもほおりっぱなし、整理するところから、相談活動は何か必要かを考えながらやりました。これもまた、発想のもとになったのが精神衛生研究所で学んだことでした。

精神衛生という言葉が珍しくて、精神衛生法で各都道府県におくことができるという法令があったので都道府県に、ある程度あったんです。ところが実態は保健所に看板があるだけでスタッフは誰もいない。保健婦さんだけというのが数年間は実態でありました。新聞に心理学者が入っていると書かれて、お客さんが殺到しまして、当初はアメリカからいい薬が入ったのではないかと期待されたりしました。他に、医療で不満を持って何も聞いてくれない、治りもしないという方がどっと来られたということでした。何よりも目新しく日本で先進的だったのは専門職種のチームワークでした。医者とソーシャルワーカーと臨床心理の3者でチームを組んでいました。国立精神衛生研究所がモデルでそれを持ちこんだわけです。

ロジャーズの紹介

ロジャーズはずいぶん日本で流行ったのですが、ちょっと誤解があったなと思うのは「非指示」です。そうとしか訳しようがなかったんですが、それがカウンセリングは何もやってはいけないのだという形で伝わってしまった一面があって、言いたいことは山ほどありながら黙って聞いているカウンセリングがあったんです。ところがそれでも相手が勝手に変わってくれるという実態も一面でありまして、私も若い時には大したこともできないで、ひたすら理解しようと聞くことだけで精一杯で、それでも相手が変わってくれちゃったりして。子どもの問題でお母さんが来て、子どもは全然会っていないのにある時に「おかげさまでうちの子どもがこんなふうによくなって」と言われた、なんでだろうと思って改めているいろいろ考えさせられたわけです。やがて、そのへの反撃で、だめだという時代が来ました。そこで去った人と、それからそこでも生き残った人と、私もその一人なんですが、私は両巨頭の先生方のもとで勉強させていただいたものですから、未だに二足の草鞋でロールシャッハについて研究させていただいておりますし、カウンセリングでの心理療法もやらせていただいています。通った領域としては医療行政のもとで医療保険のもとで、産業関係で大企業でカウンセリング研修をたくさんやりました。自衛隊にも

呼ばれていきましてカウンセリングの研修とかしましたし、教育委員会とかにも行きました。そういうことができてよかったなと思っています。今になるとそういう体験をするのは難しいかと思います。専門医というより開業医のような「何でもあり」ということを経験したことが、今になってよかったなと思っています。キリがありませんが、後は具体的にお話をしたいと思います。

司会 高柳先生、当初の頃の貴重なお話をありがとうございました。

引用文献

Kataguchi, Y. & the Ka-Ro Research Group Psychopsy: manual for Ka-Ro inkblot test. Tokyo: Kaneko Shobo

ロールシャッハ, H. 1958 東京ロールシャッハ研究会(訳) 精神診断学：知覚診断的実験の方法と結果(偶然図形の判断) 東京：牧書店

(指定討論)

指定討論 1

西川泰夫 (放送大学)

指定討論に入る前に、一、二の事柄の前置きをします。

まず、お話をいただいた方々へのお礼です。私自身の専攻分野ではない分野の歴史的展開について、それぞれが貴重なお話であったと同時に、私自身の歴史的視野に直接にはすえていなかった分野の学史的情報を豊富にいただいたことにお礼をします。なお、私のこれまでの歴史的研究にどのように取り込んでいくべきか、今後の課題とさせていただきます。そして、指定討論の指名を受けた点について少し言及します。このWSは、日本心理学会公認の分科会の一つである「心理学史研究会」の活動の一環としてメンバーの一員である企画者たちの手で、計画されたものです。実は、この研究会の責任者の役割を担っているのが、私です。実質的には、事務局長である、高砂さんの手腕に全面的に負っているのですが、その責務から指定討論を引き受けたという事情を申し添えておきます。

早速討論に入りますが、お断りしたように、直接の専門分野ではないので、各発表の内容に即して、また事実関係に関連して的確な論点を提示することはほぼ不可能です。また要点を整理し、議論を深めるための適切な質問をすることや疑問を呈する、ということも困難です。話された内容や事柄を、そうであったのか、こんなこともあったのか、とただ感心して伺うだけです。そこで、私にできることだけを述べさせていただきます。討論に代えます。

なにかといいますと、私の承知している、日本の心理学のある側面の歴史的変遷、年代史の変遷と、お話に出てきたこの方面の年代史の変遷とを重ね、お互いが無関係とは言わないまでも、相互に独立に歩んでいたその変遷を同じ時間の流れに重ねてみるのが不可欠ではないかという問題認識を、お話を伺いながら持ったという点に絞って申し上げます。こうした統合的な視点によって、心理学史の変遷を包括的にとらえられるに違いないと考えるからです。また、知らないことを理解するうえで、私にとって少なくとも既知といえる変遷史に重ねることで、見過ごしていた歴史の一こまが鮮明によみがえるからです。

その助けになるのが、私にとっては、「日本の心理学の変遷史」です。ここで言う心理学は、1877年に開設された東京大学に制度化された心理学、ことに、1888年の秋に、講師として就任した、元良勇次郎によって担当された「精神物理学」以来の経緯です。それ以前の歴史的背景は、今ここでは言及を省きます。精神物理学(あるいは、生理学的心理学)これは、世界の心理学史から言うと、従来の哲学的心理学から自立した「新心理学」を意味します。蛇足を加えると、これは、科学的心理学をさしますし、その方法論に特化すると、自然諸科学では普遍的な方法である実験を基盤とする実験心理学、ということになります。そして、1890年には、当の元良は、専任教授に就任し、以来、日本の心理学は新心理学の流れを踏襲することになったのです。しかし、この段階では、現状の理解にあるような狭い意味での実験心理学といった制約されたものでは決してなかったといえます。しかし、1913年元良の病死により、後を引き継いだ松本亦太郎以降になると、心理学の基本性格は、実験心理学の立場を鮮明にするものになっていったといえるでしょう。その一つの象徴的な出来事が、当時東京帝国大学助教授であった福来友吉の念射、転写問題に端を発する休職とその後の退任に見ることができます。福来は、担当科目が、「変態心理学」、今日の「臨床心理学」、あるいは異常心理学、さらには精神病理学などといっていいでしょう。このことが、直接・間接に、以後の日本の心理学の変遷を大きく左右したとって想像に難くないといえます。ことの詳細は、例えば、「日本心理学会 75 年史」などに譲り、先に進めると、その後大学を中核として心理学を学んだもの、専門家が輩出してくると、研究者の職能集団、機能集団として、「日本心理学会」などの組織が設立されることになります。この経緯についても、さきの「75 年史」にゆだねますが、1927(昭和2)年4月7日に、現在の「日本心理学会」が設立されました。

しかし、当時の時代背景によって、1941(昭和16)年の、第8回日本心理学会において、日本心理学会を始め、他の2学会、1協会を互いに廃止し、新たに「心理学会」への移行が議論され、最終的に決定された。その間に2回の大会が開催されますが、1944年は、戦争のため中止となっています。そして、1945(昭和20)年の敗戦を期に、1946(昭和21)年の「心理学会」総会で、それを解消し、日本心理学会は、そのもとの名に復帰しました。その元の名での大会は、1947年ですが、

1948（昭和 23）年の東北大学での大会で、これを設立以来の通算回数で、第 12 回大会とすることが決定され、以後、毎年の開催で回数を数え上げているわけです。そして、ご承知のとおり、2002（平成 14）年の広島大学での第 66 回大会で、「日本心理学会設立 75 周年」を記念しました。また、再三言及している「日本心理学会 75 年史」も公刊されたのです。

さらに、2003（平成 15）年の東京大学での第 67 回大会は、ここに、1903 年、精神物理学実験場（心理学研究室）が開設されて 100 年を記念する大会でもありました。

今年（2004（平成 16）年）のこの WS も、そうした歴史的背景の中でその役割と位置を明らかにしておくことが必要と考えます。

ところで、論点を、あらためて、戦後における日本の心理学の復興に戻します。一つ大事な事柄を指摘します。その記録は、「心理学研究、1952」に残されているのですが、当事者のほかはほとんど忘れ去られているのではないかと思いますので、言及します。これに言及することは、少なくとも私自身で言うと、心理学の学びの直接のルーツとして、とても重要な出来事がありました。私自身、最近になってようやく知るようになったことです。それは、「京都アメリカ研究セミナー」の一環として行われたもので、「実験心理学セミナー」です。ロックフェラー財団の支援と、イリノイ大学の企画で、日本側は、同志社大学と京都大学の共同主催で行われたものです。その担当として、コロンビア大学のグレアム教授による実験心理学を主体とする講義と演習です。そのさいの配布資料（大山正元東京大学教授から提供を受けた）によると、全国から 24 名の若手の実験心理学者が集い、合宿形式で、当時の最新のアメリカ心理学に触れるものでした。参加者のほとんどが、後つい最近まで、日本の心理学の担い手として、またそれに続くわれわれの世代の師として大きな役割を持っていたことがわかります。

個人的なことに触れると、私の研究のスタートと、その後の研究者への道の指導をいただいた印東太郎（現カリフォルニア大学アーバイン校・慶応義塾大学名誉教授）師もその参加者の一人でした。すでに前年師はその原著をアメリカで入手していましたが、セミナーでも課題文献でした。そのさいグレアム教授が最後まで言及を避けていた「ルナーバークの「視覚の数学的解析」がそれで、私の研究のルーツ

になりました。

以上に関する、細部への言及は、それぞれの機会に公開した論文等を参照いただくこととして、急ぎ、討論の取りまとめに入ることになります。

明らかに以上の経緯においては、残念ながら私自身は、対比的に一方におかれることの多い、日本における「臨床心理学」の歴史の変遷、ならびに個々の具体的な事項や考え方、方法論の背後にあるパラダイムに関する明示的な理解には遠いといわざるを得ないのです。

本日のWSで、この側面を直接になった当事者のオーラルヒストリーをはじめ、専門分野からの歴史的見当と考察の話をいただくことは、繰り返しますが、総合的に日本の心理学の変遷を理解する上で、貴重な機会であったことを申し上げます。

心理学の哲学的背景に即して言うと、近い過去でいうと、デカルトの「心身二元論」から由来する「心身問題」の解決に取り組んだ、そもそもの新心理学の立ち上げの経緯にもまったく重なる、議論が、なお引き続いて繰り返されていることを指摘することもできます。もちろん大事なことは、相互の統一と統合をどのように図っていくか、この点は科学的心理学の基本でもあります。一方、「心」をいかにとらえるのか、それを「神秘的」対象として、あるいは「非物質」として捉えるとして、その実体の究明には、科学的アプローチを欠かせないことも明らかではないかと思えます。それは、現在、ことに「証拠に基づいた治療」という観点に立ったとき、それにいかに答えられのか、明確な議論があると思えます。その基盤を明示する上でも、歴史的経緯についての明確な理解と認識が、いずれの分野でも欠かせないように思えます。

以上、かいつまんで、私のコメントとします。

指定討論 2

高砂美樹（東京国際大学）

東京国際大学の高砂です。私も臨床家ではありませんで、先日まで、この学会の前まで心理臨床学会を手伝っていた関係もありまして、臨床に片足突っ込みながら仕事をしています。今日の3人のお話を聞いていると、私には縁があるなと思いました。トピックス的に取り上げてタイムキーパーの役割をしたいと思います。

まずさんざん名前が出てきましたロジャーズ派が戦後すぐの頃、どのようにして日本に広がっていったかという面白い話で、これは文献的にはたくさん出てくる話だと思いますが、文献的に追うという泉野さんの手法と、実際に体験された高柳先生のオーラルヒストリー的なもの、これは心理学史の研究はなくてはならないものですが、ちょっと古くなるとオーラルはなかなか手に入りにくくなっていくということもあり、ここにいらっしゃる方々は、十分年季を積まれた先生方はたくさん周りの方にしゃべってほしい。若い方はぜひ書き留めていただきたいと最初に申し上げたいと思います。

出身は茨城県日立市ですが、さんざん出てきた大甕というのは日立市にある場所で、太平洋沿いで、いいところですが、あんな遠いところまで先生は毎年来られていたんだなと思ったんですが。この大甕は場所として特殊なので前から気になっていたんですが、中央からではなく、妙なところからきっかけになって発展していくというのが面白いと思うんです。一つは今回の話で、臨床のからみの中で、個人的に興味がある部分ではあるけれども、それが日本でどうなったのかということについて、あまりにもホットな話題なので触れにくいという点があると思います。

それは何かというと、外国の影響ということで言うと、ドイツ、アメリカが戦前でも日本にとって心理学に大きな影響を与えたわけですが、あれだけ留学生がたくさん行きながら、実質的に臨床心理学を持ち帰ったという人は戦前にはいなかったわけですね。戦後は必ず伊東博先生から始まるんです。因みに伊東博先生の最後は東京国際大学でニューカウンセリングを教えておられたので、関係があります。片口先生も国際大学で片口文庫がありますので興味のある方は見ることかできます。専門の話はよく聞くんですが、戦前に世界で最初に心理学者が資格をつかったのは

ドイツですが、1941年と遅いんですね。その時につくったものが今でも生きているんですが、その時の資格はアセスメントの資格なんです。実際には軍に役立つ人のアセスメントだった。今で言えば適性検査のための選抜だった。アメリカでは1920年代に第一次世界大戦後に臨床的な、応用的な機運が盛り上がって、その頃はカウンセリングと言わずに、コンサルティング・サイコロジーと総称していたわけです。それが第二次世界大戦前になりますと、もっと準備をして十分対応したというのが本人たちの言い分ですから、確かにクリニカル・サイコロジーという言葉が1907年にウィトマーはつくっていますが、あれはどちらかと言えば学校心理学という名前の上では齟齬があると思いますが、アメリカはアメリカでクリニカル・サイコロジー的なものはすでにあっただけですけども、日本には持ち帰っていない。このへんがどうなっているかということが個人的に興味深いところではあります。

今回はお二人ともロジャーズを報告されましたので、ロジャーズの一つの技法が流行るとか、廃るとするのは面白い。森田療法の話も最近は森田療法がもともと考えられた時は森田神経質の患者さんのためにいうことでしたが、最近の精神科医では森田式のものが当てはまる人があまりいなくなった。猛烈サラリーマンがあまりいなくなったということなんだと思うんです。そういう個々の技法の背景になっていく文化的なもの、社会的なものは相当からみがあって面白いと思うので、技法もこれだけたくさん出てくるようになりますと、どれが残って、どれが残らないかという問題もあると思いますが、なぜそれが残ったのか、残らなかったのか。こういうところについても、私がすごく長生きして200年くらい生きられればたくさん見られると思いますが、そうもいかないと思いますので、今の時点ではいろんなものを参考にしながら、なぜこれが流行ったのだろう、短い期間に流行ってまた廃るといふこともあると思いますが、バックグラウンドを見て、戦争もそうしょっちゅうあるとは思いますが、時代的なもの、事件的なものを合わせて見られればよいなと思います。

司会：ありがとうございました。時間的な制約もありまして、臨床心理学の導入という大きなテーマのごく一部ではありましたが、有益な議論であったと思います。ご参加いただきました皆様ありがとうございました。